

研究成果報告書

(国立情報学研究所の民間助成研究成果概要データベース・登録原稿)

研究テーマ (和文) AB		環境の公共哲学——理論と実践の架橋			
研究テーマ (欧文) AZ		Environmental Public Philosophy: Connecting of theory and practice			
研究氏 代 表 名 者	カナ CC	姓)コバヤシ	名)マサヤ	研究期間 B	2005 ~ 2007 年
	漢字 CB	小林	正弥	報告年度 YR	2007 年
	ローマ字 CZ	Kobayashi	Masaya	研究機関名	千葉大学
研究代表者 CD 所属機関・職名		千葉大学大学院人文社会科学研究科 教授			
<p>概要 EA (600 字~800 字程度にまとめてください。)</p> <p>本研究の目的は、環境問題研究に「公共性」という視点を取り入れることによって、思想レベルの考察と政策レベルの考察の架橋を目指すことにある。具体的には、風土論や文明論という大きな思想的テーマから環境問題を読み解き、それを公共的な政策に結びつけることを目指したのである。倫理学者、経済・政策学者、政治学者からなる、研究の中心メンバーは、以下の企画を通して、さまざまな理論を取り入れ、それを実践にどう結びつけるかを考察した。</p> <p>まず、2006 年 1 月 28 日に、シンポジウム「風土論・環境倫理・公共性」を開催し、風土論研究の第一人者オギュスタン・ベルク氏を基調講演者としてお招きし、鬼頭秀一と岸由二が環境倫理の視点から、嘉田由紀子と内山田康が地域論の視点からコメントし、桑子敏雄、倉阪秀史、広井良典が政策とのつながりを考察した。最後に小林正弥が公共哲学の観点から総括した。</p> <p>次に、2006 年 3 月 4 日、3 月 5 日に、研究会「環境倫理と公共哲学」を開催し、環境倫理学者と公共哲学研究者との対話を促した。参加者は、鬼頭秀一、丸山徳次、菅豊、池田寛二、佐藤仁、平川秀幸、丸山正次、小林正弥、山田隆夫、白水土郎、高橋久一郎、関礼子、山脇直司、丸山康司、倉阪秀史、宮内泰介、池田啓、今田高俊、栗栖聡、千葉真、蔵田伸雄、森岡正博。</p> <p>また、2007 年 2 月 4 日には、シンポジウム「文明論・環境倫理・公共哲学」を開催し、基調講演者として今道友信氏と伊東俊太郎氏をお招きし、エコエティカと文明について、および環境問題と科学文明についてお話しいただいた。それを受けて、鬼頭秀一、広井良典、倉阪秀史が環境倫理と政策論の立場からコメントし、最後に小林正弥が公共哲学の観点から総括した。</p> <p>最後に、2007 年 5 月 7 日に、研究会「場所論・認識論・文明論——伊東俊太郎氏を迎えて」を開催し、伊東俊太郎氏から「場所論による認識論の転換」について講演をいただいた。それをふまえて、小林正弥が比較文明論と公共哲学のつながりについて報告した。</p> <p>以上の 2 回のシンポジウムおよび 2 回の研究会は、報告書にまとめられ、一部は雑誌に再掲された。これらにより、風土論と文明論という思想的考察と、公共的な政策とのつながりが見えてきた。今後はこれらの成果をふまえて、環境の公共哲学と公共政策について議論していく予定である。</p>					
キーワード FA	風土	文明	環境倫理	公共哲学	

(以下は記入しないでください。)

助成財団コード TA					研究課題番号 AA								
研究機関番号 AC					シート番号								

発表文献（この研究を発表した雑誌・図書について記入してください。）									
雑誌	論文標題 ^{GB}	特集：風土論・環境倫理・公共性							
	著者名 ^{GA}	小林正弥ほか	雑誌名 ^{GC}	『公共研究』					
	ページ ^{GF}	3～171	発行年 ^{GE}	2	0	0	6	巻号 ^{GD}	第3巻第2号
雑誌	論文標題 ^{GB}								
	著者名 ^{GA}		雑誌名 ^{GC}						
	ページ ^{GF}	～	発行年 ^{GE}					巻号 ^{GD}	
雑誌	論文標題 ^{GB}								
	著者名 ^{GA}		雑誌名 ^{GC}						
	ページ ^{GF}	～	発行年 ^{GE}					巻号 ^{GD}	
図書	著者名 ^{HA}	小林正弥（編）							
	書名 ^{HC}	「公共性」概念の検討——環境問題をめぐって——							
	出版者 ^{HB}	千葉大学	発行年 ^{HD}	2	0	0	6	総ページ ^{HE}	102
図書	著者名 ^{HA}	小林正弥（編）							
	書名 ^{HC}	シンポジウム報告書「文明論・環境倫理・公共哲学」							
	出版者 ^{HB}	千葉大学	発行年 ^{HD}	2	0	0	7	総ページ ^{HE}	68

欧文概要 E Z

This investigation aimed to link theoretical research and policy studies by introducing the viewpoint of “publicness” into the environmental issues.

We tried to solve the environmental problems, focusing on the theme of studies of Climate and Civilizations for reflecting the insights on public policies.

First, we held a symposium “Studies of Climate, environmental ethics and publicness”. We invited Augustin Berque, a leading scholar in this field, and various scholars on social studies of local environment, policy studies and public philosophy (in January 28, 2006).

Secondly, we held a workshop “environmental ethics and public philosophy”, and there were discussions among scholars on environmental ethics and public philosophers (in March 4-5, 2006).

Thirdly, we held a symposium “Studies of Civilization, environmental ethics and public philosophy”. We invited Tomonobu Imamichi and Shuntaro Ito. Imamichi delivered the address “eco-ethics and civilizations”. Ito spoke on “environmental problems and the scientific civilization” and there were valuable discussions from the perspectives of environmental ethics, policy studies and public philosophy (in February 4, 2007).

Lastly, we held a workshop “Studies of Place, Epistemology, and Civilizations”. Shuntaro Ito made a presentation “Epistemological turn by studies of Place”. Masaya Kobayashi talked on the relationship between studies of comparative civilizations and those of public philosophy (in May 7, 2007).

These two symposiums and two workshops were printed in working papers, and partly were reprinted in an academic journal. We found out relationship between theoretical arguments (studies of Climate and studies of Civilizations) and public policies. We are planning to study “environmental public philosophy and public policies” on the basis of this research.